社会貢献活動

伊藤忠商事は地球的視野に立って「良き企業市民」として果たすべき役割を自覚し、地域社会、国際社会との調和を図り、持続可能な社会の実現に貢献しています。これらを実現するため、3つの重点分野からなる「社会貢献活動基本方針」を定め、グループ会社等とも連携して活動しています。

社会貢献活動基本方針



 次世代育成
伊藤忠商事は、次世代を担う青少年の健全な育成を支援する活動を行い、心豊かで活力ある社会の実現に 貢献します。



2. 環境保全 伊藤忠商事は、環境保全活動を積極的に行い、社会の持続的な発展に貢献します。



3. 地域貢献 伊藤忠商事は、良き企業市民として地域社会との良好な関係を構築し、地域社会との共生を図ります。

社会貢献活動アクションプラン

地域社会及び国際社会と持続可能な社会を実現するために定めた「社会貢献活動基本方針」の中でも特に重要と定める3つの分野に関し、PDCAサイクルに基づき社会貢献活動を推進しています。これらの活動は、2015年に国連で採択されたSDGs(持続可能な開発目標)の達成にも貢献しています。

SDGsに関する詳細はP12をご参照ください。

課題	2016年度 行動計画	実施状況※	2016年度の実績	2017年度 行動計画	SDGs (持続可 能な開 発目標)
次世代育成を 目的とした国 内外の社会貢 献事業の推進 【基本方針1 次世代育成】	 キッザニア東京のエコショップパビリオンの運営。 インド移動図書事業の継続推進。 700人の子どもたちが移動図書館の活動に参加。 200人の子どもたちが正規の学校に入学。 	4 4 4	 マイ箸、リサイクルせっけん、POCバッグと定期的にエコグッズを変え、年間体験者数も昨年より増加。また、オープン以来15万人の子ども達がアクティビティに参加し、約15万本の苗木に相当する費用をケニアに寄贈。これにより約66haの熱帯林の回復に貢献した。 目標通り700人の子どもたちが移動図書館の活動に参加し、読み書きの機会を得た。また、そのうち210人が正規の学校に入学を果たした。 	 キッザニア東京のエコショップ パビリオンの運営。 国内外において次世代育成を目 的とした新規プロジェクトの発 掘とその推進。 	1. 4. 10. 13. 15.
環境保全を目 的とした社会 貢献事業の実 施およびフォ ロー 【基本方針2 環境保全】	アマゾンの生態系保全プログラム「フィールドミュージアム構想」のマナティーの野生復帰事業を支援開始。 ・マナカプルにマナティー半野生復帰用の湖を設置開始。 ・半野生湖に生息する13頭のマナティーの健康診断実施。 ・6頭のマナティーを半野生湖へ放流。 ・3頭のマナティーをアマゾン川へ放流。	स स स	 マナカプルに湖を設置する打ち合わせを開始。 12頭のマナティーの健康診断を実施。 9頭のマナティーを半野生湖へ放流実施。 アマゾン川へ放流後再捕獲されたマナティー1頭の健康診断を実施した結果、体長、体重共に増加しており、川へ放流した後も順調に自然環境に適応していることを確認。 5頭のマナティーをアマゾン川へ放流。 マナティー放流時に、地域の住民200名以上に参加してもらい、マナティ保護を通じ、生物多様性保全の重要さの啓蒙を行った。 地元の漁師にマナティ保全の重要性を理解してもらい、漁師2名の本事業への参画を行った。 	1. アマゾンの生態系保全プログラム「フィールドミュージアム構想」のマナティーの野生復帰事業の支援を継続。 ■ 17頭の健康診断実施。 ■ 8頭の半野生湖へ放流実施。 ■ 5頭をアマゾン川へ放流。 ■ 地域の住民100人に学びの機会を提供する。 ■ 地元の漁師にマナティ保全の重要性を理解してもらい、漁師2名の本事業への参画を目指す。 2. フィールドステーション施設内の食堂や展示会場など、来場者が集う施設(ビジターセンター)を2017年度に着工予定。	13. 15.
地域貢献を目 的とした施設 運営・啓発活動 【基本方針3 地域貢献】	伊藤忠メディカルプラザの支援。 伊藤忠青山アートスクエアの企画・運営。 伊藤忠子ども、効果の・な災地支援を実施。本業を通じた被災地支援をして、たかたのの生産者として、現地の農業発展に寄与する。目標収穫数量260t。	4 4 4	1. 資金面、情報面で支援。 E療経営講座と称して地域の医療従事者向けの医院経営に役立つ講座を3回開催し、延べ182人が参加。 E工連携人材育成プログラムを2回開催、延べ124名が参加。 国際医療交流事業として海外の大学・医療施設11機関と交流事業を行った。 2. 様々な社会的課題を解決する一助として「アートを通じた社会貢献」をテーマに展覧会16本を出展者と共に企画・実施し、昨年を上回る来場者となり、オーブン以来の来場者数は17万人を超えた。 3. 伊藤忠子どもの夢ファンドを通じて被災地の子供たちの夢を応援するイベントを7回実施。被災地の岩手県陸前高田市ブランド米「たかたのゆめ」の販売支援として、陸前高田市物産展を3.11に伊藤忠東京本社横にて実施。生産農家数:47軒、収穫量:200tと、被災地の農業発展に寄与した。	 資金面、情報面の支援を継続。 医療経営講座は6回開催、200人参加。 国際医療交流事業として海外10大学/医療施設との交流事業を行う。 医工連携人材育成プログラムを2回開催、100名参加。 伊藤忠青山アートスクエアの企画・運営。 伊藤忠子どもの夢ファンドを通じ、効果的な被災地支援を実施。本業を通じて「たかたのゆめ」を支援し、現地の農業発展に寄与する。 	3. 4. 10. 11.



※ 👅 : 未実施

社会貢献の主な活動:次世代育成

伊藤忠記念財団への支援

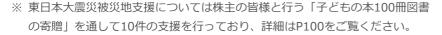
伊藤忠商事は、1974年に伊藤忠記念財団(2012年に公益財団法人へ移行)を設立して以来、青少年の健全育成を目的とした社会 貢献活動を継続して進めてきました。現在は、「子ども文庫助成事業」、「電子図書普及事業」を活動の柱に、子どもたちの健全な 成長に寄与する活動を行っています。

- 子ども文庫助成事業

子どもたちの読書啓発に関わる草の根活動の支援として、地域の子どもたちに対し読書啓発活動を行っている民間団体及び個人を対象に1975年から助成を行っています。時代の変化に対応しながら、図書セットの助成、入院中の子どもなどへの読書支援のプログラムを加え充実を図りつつ、これまでに延べ2,179件(海外を含む)の子ども文庫等に対し、約10.6億円の助成を行いました。

2016年度は下記の表の通り助成を行いました。2017年3月に、購入費助成受領者、文庫功労賞受賞者をはじめ、子どもの読書関係者や助成財団の方々、約140名のご出席を頂き「平成28年度 子ども文庫助成事業 贈呈式」を開催しました。

	2016年度助成件数
子どもの本購入費助成	43件(うち海外1件)
病院施設子ども読書支援 購入費助成	3件
子どもの本100冊助成	26件(うち海外8件)
海外日本人学校/補習校図書助成	海外5件
子ども文庫功労賞	3件
合計	80件(うち海外14件)





助成先のスイス ツーク日本語学校



伊藤忠記念財団では年に一度、子ども文庫助 成事業贈呈式を開催



■ 電子図書普及事業

マルチメディアDAISY図書の編集・配布

マルチメディアDAISY図書は、電子書籍の国際規格の一つで、障害などによって 読むことに困難がある人たちへ様々な配慮がされている書籍で、パソコンやタブ レット端末で再生できます。伊藤忠記念財団では、絵本や児童書をマルチメディ アDAISY図書に編集し、全国の特別支援学校や公共図書館に寄贈しています。これまでに309作品を電子化し、延べ5,448か所に送付しました。



読み上げ機能でベッドでも読める電子図書

	2016年度	累計 [※]
製作作品数	66作品	309作品
送付先	1,121箇所	5,448箇所

※ 2011年度からの累計



皇后陛下にもご視察いただいた「本の力展」 (マルチメディアDAISY図書の展示 2014

2016年は障害のある中学生からの希望を受け、小倉百人一首を電子化しました。 読み上げは都立特別支援学校に通う中高生が担当し、歌の情景を都立高校10校の 美術部等の生徒がイラストで表現してくれました。さらに任天堂株式会社が無償 で札の電子データを作成・提供下さるなど多方面からの協力を得て完成しまし た。



全盲の中学生が点字をたどって百人一首を読 み上げてくれました

また都道府県立図書館に要請し、共同で郷土の昔話を電子化する「日本昔話の旅」には10県10館から協力頂き、各県の地元高校の 美術部や紙芝居、音訳団体など大勢の方々の力を結集し、それぞれの地域に根付いた以下10話の昔話を電子化することができまし た。

- 茨城県「額田のたっさい」
- 岐阜県「養老の泉」
- 徳島県「青木藤太郎」
- 沖縄県「クスクェーのおはなし」
- 埼玉県「見沼のふえ」
- 三重県「ハチの恩がえし」
- 愛媛県「道後温泉の鷺石と玉の石」 高知県「又吾とえんこう」
- 山梨県「鬼の千里靴」
- 山口県「まあだ まだ わからん」



茨城県室図書館で開催された「額田のたっさい」 の原画展



2016年度に電子化された10話

読書バリアフリー研究会の開催

障害のある子どもたちへ読む楽しさを提供できる人材を養成するために、読書バリアフリー研究会を開催しています。教職員、図 書館員、医療関係者などを主な対象として、読むことの障害となる様々な原因と、それを解消するために有効な媒体や支援方法に ついて学ぶ機会を提供しています。

2016年度は、埼玉、岐阜、秋田などで8回開催し、412名の方々に参加いただきました。

| インドでセーブ・ザ・チルドレンと移動図書館プロジェクトを展開

ムンバイ市M-East区で、ストリートチルドレンや児童労働に従事する、学校に通っていない子どもたちを対象に移動図書館プロジェクトを行っています。2013年11月から2017年3月までで2千5百万円を投じて公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンとセーブ・ザ・チルドレン・インドを支援、移動図書館として運行するバスにラッピングを施し、椅子、黒板、そして本棚を設置、教育ファシリテーター※とカウンセラーを配置して、学校の学習環境と近い内装にしました。音声や動画などの教材も駆使して楽しく参加できる学習の機会を提供することで、子どもたちが学校へ通うための橋渡しになることを目的としており、この移動図書館を通じて2695人の子どもたちが学びの機会を得て、うち592人が正規の学校教育に戻ることができました。



※ 教育ファシリテーターとは、移動図書館における教員の役割を果たす職員。多様な年齢やバックグラウンドからなる子どもたちが自主的に学び、参加できる学習環境の場づくりを行う。

「キッザニア東京」にて環境パビリオンを展開

伊藤忠商事は2012年4月より、こども向け職業体験施設「キッザニア東京」に環境パビリオン「エコショップ」を展開しています。

伊藤忠商事が参画する世界的な環境活動「MOTTAINAIキャンペーン」での環境教育のノウハウを活かし、子どもがエコ活動を体感できるように、環境素材を使ったエコバッグ、マイ箸、リサイクルせっけんづくりなど自分だけのオリジナル商品を製作できます。

2016年8月には、商社の仕事を実際に体験できる特別プログラムとして「Out of KidZania」を東京本社にて、2日間に亘り開催しました。「Out of KidZania」とは、公募で選ばれた30人の小学生が様々な課題に対して子どもならではの視点で解決策を提案することで、子ども達の課題解決能力を育成するプログラムです。3年連続して開催しており、今回は(株)ユーグレナと協力し、「新技術でビジネスを生み出す職業体験」をテーマにしました。「世の中の問題を解決するミドリムシを使った新商品企画と販促案」をチームで考え、商談ルームで先輩社員にプレゼンし、全チーム大人顔負けの個性あふれる素晴らしい企画を提案し、キッズ商社パーソンとして2日間で大きく成長しました。今後も、子どもに人気の高い施設である「キッザニア東京」に、グローバルな視点で環境保全について楽しく学べる場を提供すると共に、子ども達に様々なイベントを提供し、持続可能な社会を担う青少年の育成を目指してまいります。



リサイクルせっけんづくりの様子



Out of KidZaniaに参加した子ども達 が真剣にアイデアを出し合う様子

認定NPO法人国境なき子どもたち(KnK)のフィリピンでの青少年支援施設「若者の家」支援活動

開発途上にある国々のストリートチルドレンや大規模災害の被災児等を支援する認定NPO法人国境なき子どもたち (KnK) を通じ、2009年12月よりフィリピンのマニラ郊外にある青少年自立支援施設「若者の家」に係る支援を続けています。

2012年、子どもたちの将来の自立支援に繋がる、職業訓練所の改築の支援を実施しました。2013年、同施設の地下や屋根を改修したことで、実践的な技術習得のための職業訓練コースの拡充が可能になりました。2015年には、運営に係る費用の支援(150万円×3か年)を始め、「若者の家」の子どもたちが尊厳を取り戻し社会に貢献できる大人に成長できるよう教育や食事の提供、心のケア、職業訓練などに使われています。また、当社の支援はKnKフィリピンの活動の安定化につながり、活動継続を可能にする大きな基盤となっているとの評価を受けています。

また、同施設には伊藤忠商事マニラ支店の社員がボランティア等で定期的に訪れています。

2016年5月にはKnKフィリピンの活動15周年を記念した式典が開催され、子どもたちの憧れのファーストフードを持って、マニラ 支店から6名が祝賀行事に参加しました。また10月から11月にかけて、本社の若手社員が同施設およびスラム地域パヤタスでボランティアを体験したほか、12月に若者の家でのクリスマスパーティを主催した折には、現地社員11名がファーストフードやアイスクリームに加えクリスマスプレゼントも持参し、ゲームや劇などで子どもたちと交流を深めました。



KnKフィリピン15周年記念式典では感謝状をいただきました



クリスマスパーティにて



伊藤忠商事マニラ支店ボランティアと

中国大学生のホームスティ受入

伊藤忠商事では、中国大学生に日本をよく理解してもらうための「走近日企・感受日本」プログラム(中国日本商会主催)に第1回から協力しています。 日中友好の目的で、年2回、中国からの大学生が来日し、民間交流を図るプログラムで、2016年度も5月に第18回、12月に第19回の同プログラムが実施され、伊藤忠グループから3名の社員が中国大学生をホストとして受け入れ、家族と一緒に民間ベースの交流を楽しみました。



中国大学生(右から二人目)とホストファミリー

在日ブラジル人小中学生の支援

日本の在日ブラジル人学校の子どもたちの直面する課題として、子どもたちの日本語力の不足、貧しい施設や教材不足、不就学児童の多さなどの問題があり、日本で暮らしながら日本の文化や言葉に触れる機会が少ないのが現状です。

2015年10月14日、日伯外交関係樹立120周年を記念して、伊藤忠商事がオフィシャルスポンサーを務める「キッザニア東京」にて、ブラジルをテーマにした貸切イベント「ITOCHU Festa do Brasil」を開催、群馬・茨城・埼玉の各県にある6つの学校から約240人の在日ブラジル人小中学生を招待しました。これをきっかけとして、キッザニアでの体験を通じた子ども達へのキャリア教育のため、2016年4月には、茨城、東京、神奈川、千葉、埼玉在住のブラジル人小学生、中学生計45名を、キッザニア東京に招待しました。また、2017年6月にも日伯経済文化協会の活動に賛同しキッザニアチケットを協賛しました。





キッザニアを満喫したブラジル人小中学生

■夏休み環境教室の実施

より持続可能な社会を築くためには、一人ひとりが環境に配慮した生活を心がけることが大切です。そのような観点から、伊藤忠商事では環境問題への関心を高める取組の一環として、1992年より毎年夏に「夏休み環境教室」を地域の子どもたちや社員家族を対象に開催しています。今までに累計約1,200名以上の次代を担う小学生に環境保全、生物多様性保全の学び場を提供してきました。

2016年度は、7月28日に【生物多様性】ウミガメ教室、【防災】自然災害教室の二部構成で開催、76名の小学生が参加しました。前半は小笠原諸島より迎えたアオウミガメを間近で観察することで、生態及び絶滅危惧種について学び、後半は雪崩や地震の疑似体験をすることで、自然災害の仕組み、災害への対処方法などについて学びました。



ウミガメを間近で観察



「自然災害教室」の様子

小中高校生の企業訪問の受入

伊藤忠商事では、文部科学省の指導要領に企業訪問が組み込まれたことに呼応して、「生徒が社会的役割・職業生活を理解し、社会人としての自立を促す」ことを企業としてサポートするために、小中高校生の企業訪問を受け入れています。

2016年度は、東京本社において、近隣地域の青山小学校・青山中学校や、二代目伊藤忠兵衛の母校でもある滋賀県立八幡商業高等学校など、計8校の訪問を受入れました。また、小林会長がふるさと大使を務める福井県若狭町から、三方中学校の企業訪問を3年連続で受け入れ、小林会長自らが郷里の中学生へ講演しました。



港区立青山小学校の校外授業「高いと ころから地域を見る!



滋賀県立八幡商業高校の生徒が自ら仕 入れた日本各地の特産品をPR



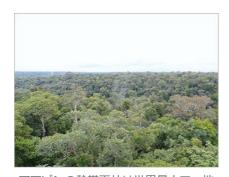
福井県若狭町立三方中学校3年生へ向けて小林会長が講演

アマゾンの生態系保全プログラム支援

伊藤忠商事は環境保全、生物多様性を目的とし、京都大学野生動物研究センターがブラジルの国立アマゾン研究所と進めるアマゾンの熱帯林における生態系保全プログラム「フィールドミュージアム構想」および研究施設「フィールドステーション」の建設に関する支援を2016年度より実施しています。これらのプロジェクトは、日本の国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)と独立行政法人国際協力機構(JICA)が共同実施する、地球規模課題解決と将来的な社会実装に向けて日本と開発途上国の研究者が共同で研究を行う「SATREPS(サトレップス)プロジェクト」の一つにもなっています。

アマゾンは地球上の熱帯雨林の半分以上に相当し、生態系の宝庫とも呼ばれているエリアです。しかし、急速な経済発展や、現地住民の環境教育不足による森林伐採等から、近年その貴重な生態系が失われつつあります。京都大学野生動物研究センターは国立アマゾン研究所と共同でアマゾンの貴重な生態系を維持する研究及び普及活動を行っており、日本が得意とする先端技術を利用して、保全のための研究や施設整備を日本とブラジルが共同で行っています。これにより、これまで研究が困難だったアマゾンの水生生物(カワイルカやマナティー)や熱帯雨林上層部の研究など、多様な生物や生態系に関する保全研究が飛躍的に進むことが期待されます。絶滅危惧種であるアマゾンマナティーを救う活動もその一つで、伊藤忠商事はアマゾンマナティーの野生復帰プログラムを支援しています。密漁に伴う負傷などにより保護されるマナティーの数が増える一方で、自律的な野生復帰は難しいことから、マナティーの野生復帰事業の確立が急務となっております。伊藤忠商事の支援により、3年後に10頭以上のマナティーが野生復帰し、20頭以上が半野生復帰することを目指します。

研究施設「フィールドステーション」建設支援については、施設内の食堂や展示会場など来訪者が集う施設(ビジターセンター)を建設・整備するための資金を寄付しました。これらを通じて、アマゾンの熱帯雨林に生息する多種多様な動植物・豊かな自然と触れあう機会を提供し、地域住民や観光客の方々への環境教育に貢献します。なお、この取組は、JICAにおいて産官学が協力してアマゾンの生態系保全に取り組む初めての事例となります。



アマゾンの熱帯雨林は世界最大で、地球上の酸素の1/3を供給するといわれている



絶滅危惧種のアマゾンマナティー



フィールドミュージアム内のビジター センター (完成予想図)

ボルネオ島での熱帯林再生及び生態系の保全プログラム

伊藤忠商事は、2008年の創業150周年を記念する社会貢献活動として、社員アンケートにより要望の多かった「森林保全」をテーマとした本プログラムの実施を決定し、2009年度から公益財団法人世界自然保護基金ジャパン(WWF)と協業し、ボルネオ島北東部のマレーシア国サバ州北ウルセガマにおいて、熱帯林再生及び生態系の保全プログラムを実施しました。ボルネオ島在来の植物種の苗木を一定の間隔で植林し、苗木の周辺の除草等の維持管理作業を継続することで、森林の再生を目指してきました。これらの作業は、サバ州政府森林局とWWFマレーシアが合意した手法に則って行われ、植林する樹種については現地の在来樹種のフタバガキ科を中心に約60種に及ぶ多種多様な樹種を環境に合わせて植林していくなどきめ細かい作業を行いました。この際、より効果的な森林再生とボルネオ



苗木の植樹

オランウータンの生息地としての環境の改善のため、現地の状況に応じて成長が速い種(パイオニア種)や成長の遅い種(フタバガキ科の植物が中心)を植えたり、ボルネオオランウータンの食物となる果実がなる樹種を植えるなどの工夫を行いました。 7年をかけて行われた植樹及びメンテナンス作業についてはWWFとサバ州政府森林局により、基準に沿って作業が行われているかを作業ごとに実地で検証、基準に沿わない場合は修正作業が行われ、2016年1月14日、再生を支援した全967へクタールの植林及び維持管理作業が完了しました。これは一般企業の植林活動支援としては最大規模の面積となります。

絶滅危惧種アオウミガメ保全活動の支援

伊藤忠商事は、生物多様性の保全を目的として、環境省レッドデータブックにて絶滅危惧種に指定されているアオウミガメの保全活動を認定NPO法人エバーラスティング・ネイチャー(ELNA)を通じて支援しています。ELNAは、アジア地域の海洋生物及びそれらを取り巻く海洋環境を保全していくことを目的に1999年に設立され、神奈川県より認定NPO法人の認定を受けている団体です。アオウミガメは、日本では小笠原諸島の砂浜で産卵をします。海岸の開発により砂浜が少なくなり、ウミガメの産卵場所が減っていることや、海岸のゴミをアオウミガメが間違って食べてしまうことなど、人間が自然界に与える影響は大きく、人の生活がウミガメに深く関わっています。アオウミガメ保全活動の取組の一環として、2016年7月に、アオウミガメを通して生き物や環境の大切さを学ぶ「環境教室」を、港区青山近隣の小学生や社員家族に実施しました。より持続可能な社会を築くためには、一人ひとりが環境に配慮した生活を心がけることが大切です。そのような観点から、環境問題への関心を高める取組の一環として、1992年より毎年夏に環境教室を地域の子どもたちを対象に開催してきており、今までに累計約1,200名以上の次代を担う小学生に環境保全、生物多様性保全の学び場を提供してきました。



環境教室に積極的に参加する子ども達



環境教室でのレクチャー風景

マニラ麻農園リハビリテーション・プロジェクトを支援

1912年に開設したマニラ支店の100周年を記念し、2012年6月にフィリピン中部のソルソゴン州農村地帯においてマニラ麻農園リハビリテーション・プロジェクトの支援について、フィリピン繊維産業開発局及び地元の農業組合であるSt. Ann's Family Service Cooperativeと協定を締結しました。これに基づき、90ヘクタール分(約14万4千本)のマニラ麻の植付と栽培に必要な資金の全額である200万円を拠出、2015年6月までに全ての作付が完了しました。また、本プロジェクトを通じて年間18トンのCO2吸収が見込まれています。



| キッザニア東京「エコショップ」出展によるケニアの植林活動支援

伊藤忠商事は、こども向け職業体験施設「キッザニア東京」に、子どもがエコ活動を体験できる環境パビリオン「エコショップ」を2012年4月から展開しています。当パビリオンでは、子ども一人の参加ごとに、植林用の苗木1本分の費用がケニアの植林活動である「グリーンベルト運動」に寄贈される仕組みとなっており、2017年3月迄に約15万人の子ども達がアクティビティに参加し、約15万本の苗木に相当する費用をケニアに寄贈しました。この費用は、ケニアにおける植林の他にも、森林再生の取り組みを継続する際の雨水貯留や、生態学的に健全な森林資源の活用を目的とした地域住民へのワークショップの実施等に使用されています。2017年度からは、「アマゾンマナティー野生復帰事業」(マナティー里帰りプロジェクト)の推進として、当パビリオンを「アマゾンの生態系保全」をテーマにリニューアルし、パビリオンの体験者数に10円を乗じた金額を、アマゾンマナティーのミルク代としてブラジルに寄贈する予定です。



子どもの参加1人につき、植林用の苗木一本分の 費用を「グリーンベルト運動」に寄贈



ケニアの植林活動(写真提供:毎日新聞)

「伊藤忠メディカルプラザ」設立で、神戸医療産業都市の発展へ寄与

2014年10月、国内最大級の医療クラスターである神戸医療産業都市に国際医療交流を目的とした施設「伊藤忠メディカルプラザ」がオープンしました。伊藤忠商事は運営主体の公益財団法人神戸国際医療交流財団に対して建設資金として5億円を寄付しています。東南アジアを中心とした諸外国の医師や医療関係従事者へ教育・技術トレーニング等の人材育成や、海外からの研修生受入事業、大学などと連携した医療機器開発、地域の医療業者向けセミナーなど各種研究事業等の発展が、国内外で期待されています。2016年度は、国際医療交流事業として海外の大学・医療施設11機関と交流事業を行いました。また、医療経営講座と銘打ち、地域の医療従事者向けの医院経営に役立つ講座を3回開催し、延べ182人が参加。医工連携人材育成プログラムも2回開催、延べ124名が参加しました。



伊藤忠メディカルプラザ外観

地域のCSRの拠点「伊藤忠青山アートスクエア」

2012年10月に東京本社に隣接するシーアイプラザに、CSRの拠点として「伊藤忠青山アートスクエア」をオープンしました。アートを通じた「次世代育成」、「地域貢献」、「国内外の芸術や文化の振興」などを目的に、みずみずしい感性あふれる優れた作品展や国際交流の懸け橋となるイベントなどを、さまざまな文化が息づく街、東京・青山から発信しています。2016年度は下記の通り14件の展覧会を行い、2017年3月末時点でオープン以来の来場者数は約17万人。今後も、伊藤忠商事は、アートを通じて様々な社会的課題に取り組み、定期的に展覧会を実施することによって、地域の生活文化創造への貢献を目指していきます。



伊藤忠青山アートスクエア外観

会期	展覧会	課題	概要
2016年3月21日~ 4月18日	Get in touch 「Warm Blue MAZEKOZE Art II」	障害者自立支援	昨年に続き、一社)Get in touch(代表:東ちづる)が4月2日「世界自閉症啓発デー」のコンセプトカラー「ブルー」をテーマにしたアート展を開催。「世界ダウン症の日」からスタートした。
2016年4月23日~ 4月30日	東京手仕事展	国際交流	東京都及び東京都中小企業振興公社が進める「東京手仕事 プロジェクト」初の展覧会を開催。東京の伝統工芸品や、 職人とデザイナーがコラボして開発した新商品を初公開。
2016年5月3日~ 5月31日	自転車博覧会2016 モールトン展 〜素晴らしき小径車の世界 〜	地域貢献	4年連続開催の「自転車博覧会」は、20世紀後半の自転車 の発展に寄与し、大英帝国勲章の授与を受けたアレック ス・モールトン氏の貴重な小径車を展示。
2016年6月6日~ 6月25日	LOVE THE MATERIAL in AOYAMA	次世代育成	日本の新しい世代のアーティストが生み出すコンテンポラリークラフト展を開催。金属、陶芸、ガラスなど多種多様な素材を愛することで生まれたコンテンポラリークラフト作品を100品以上展示。
2016年7月7日~ 7月24日	むらいさち写真展 FantaSea	環境保全	水中写真家むらいさち氏が撮影した幻想の水中世界の写真 を厳選して展示。海が持つ神秘的な力と美しさを表現する ことで、環境保全の重要性を発信し、生物多様性の保全に 貢献。
2016年7月27日~ 8月27日	HAPPY BIRTHDAY EARTH 展覧会 〜子どもたちの絵で地球を 塗り替えよう〜	次世代育成	特非)子供地球基金が、戦争や災害により心にトラウマを 抱える世界各地の子どもたちが描いた絵を展示する展覧会 を開催。夏休みの時期に合わせて子供向けのアートワーク ショップを実施。

会期	展覧会	課題	概要
2016年9月7日~ 9月19日	田附勝・石川竜一写真展「東北・沖縄」	次世代育成	写真評論家 清水穣氏のキュレーションによる、次世代育成を目的とした写真展第一回。「写真界の芥川賞」木村伊兵衛写真賞受賞者 田附氏、石川氏の「東北」「沖縄」をテーマにした写真を展示。
2016年9月22日~ 10月2日	中島大輔写真展 「イメージの感触 taken with iPhone」	次世代育成	写真評論家 清水穣氏のキュレーションによる、次世代育成を目的とした写真展第二回。写真家 中島大輔氏がiPhoneで撮影した写真をiPhone、iPad100台で展示。最も大衆的な媒体で現代アートを提起。
2016年10月5日~ 11月6日	江戸切子若手職人10人展 〜硝子と切子〜	国際交流	4回目となる江戸切子若手作家の展覧会。今回は「硝子と切子」がテーマ。展示ディレクターに建築家の道田淳氏を起用、鏡を使って江戸切子の多面的な魅力を紹介。
2016年11月11日~ 12月20日	金澤翔子書展 - 平和の祈り -	障害者自立支援	金澤翔子書展第3弾。米国オバマ大統領の被爆地・広島訪問、リオデジャネイロでの平和の祭典など「平和」についての想いを強くした2016年に合わせ、金澤翔子さんが感じたこと、伝えたいことを表現した作品を展示。
2016年12月23日~ 2017年1月15日	アートで祝おう 2017 「酉 とりどり展」	次世代育成	今回で3回目となる干支をテーマにした新春企画。35歳以下の新進気鋭若手アーティスト総勢120人が「酉」をテーマにした作品を出展。
2017年1月17日~ 1月25日	書の未来展	次世代育成	故・井上有一氏の書を受け継ぐ、山本尚志氏ら新進気鋭の 書道アーティスト8人のグループ展。書道の世界を国内外 のアートシーンに対して訴求。
2017年1月28日~ 2月14日	須藤和之 新進日本画家展 -季節を渡る風-	次世代育成	2017年伊藤忠商事絵画カレンダーに採用された、若手日本画家 須藤和之氏の展覧会。身近で小さな生き物を中心に季節と風をテーマにした日本画の大作を多数展示。
2017年2月20日~ 3月6日	第2回 東京都立特別支援学校 アートプロジェクト展 ~私の色、私の形、	障害者自立支援	東京都教育委員会と東京藝術大学美術学部が連携し、44校の都立特別支援学校の生徒の応募作品830点から選定された50点を展示。



「むらいさち写真展 FantaSea」



「HAPPY BIRTHDAY EARTH 展覧会〜子どもたちの絵で地球を塗り替えよう〜」ワークショップ「白布に皆で絵を描こう!!」



「江戸切子若手職人10人展 ~硝子と切子~」



「金澤翔子書展 - 平和の祈り -」席上揮毫(きごう)

第2回伊藤忠サマーコンサートをサントリーホールで開催

1991年より、伊藤忠商事東京本社にて23回にわたり開催してきたロビーコンサートを、2015年から開催場所をサントリーホールに移し第2回となる「伊藤忠サマーコンサート」が2016年7月20日に開催されました。昨年を上回る約1,900名以上が来場し、高原守氏が指揮するニューヨーク・シンフォニック・アンサンブルに、後半は都立三田高校のオーケストラ及びコーラスの総勢98名が加わる大編成となり、今までにない迫力ある演奏となりました。地域の高校生との共演は、次世代育成を目的として2015年より実施していますが、生徒たちは高原氏による2度の練習会とその後の猛練習の成果を如何なく発揮し、緊張しながらも見事な演奏を披露、会場からは万雷の拍手と歓声が送られました。



竹下景子さん、高原指揮者(右)、小林会長の ミニトーク



サントリーホールでの初の演奏

海外店での地域貢献活動

伊藤忠商事は世界62ヶ国に103拠点の海外店(2017年4月1日現在)を持ち、それぞれの地域において事業活動による地域貢献に加え、地域社会の一員として、地域の課題は何か、伊藤忠らしい貢献は何かについて考え、各地で地域貢献活動を行っています。下記は2016年度に実施した活動の抜粋です。

アメリカ

ボランティアがブロンクスの公立小学校を大変身

ITOCHU International Inc.では、社員が、地域貢献となるさまざまなボランティアに年間を通じて積極的に参加しています。2016年10月22日には、吉田CEOを含む社員30名が、NY Cares主催のボランティア活動に参加し、ブロンクスにある公立学校にて、子どもたちの勉強や運動のモチベーションを上げることを目的として、校舎の壁塗りをしたほか、壁画やラミネートしたバッジやポスターを制作しました。



グアテマラ

移動病院プロジェクトを支援

グアテマラでコーヒー集荷・精選・輸出を担うグループ会社のUNEX社は、コーヒー輸出組合の移動病院プロジェクトを支援しています。コーヒー輸出用のコンテナーを改造した移動トラックで同国内のコーヒー生産地等6県9か所を巡回し、コーヒー生産者の歯科診療及び一般診療を実施しました。治療費が高額なことを心配し、病院や歯科医院になかなか行くことのない人びとが多く、歯科診療1,068名、一般診療2,561名が受診しました。



イギリス

日欧文化理解促進のための日英音楽協会への寄付

伊藤忠欧州会社では、日英両国の音楽を通じた文化交流を目的として、日英音楽協会を1991年の設立当時から支援しています。2016年は同協会設立25周年を祝し、来日コンサートが国内6か所で開催されました。



アゼルバイジャン

「SOS子どもの村」火災被害による施設修復を支援

子どもの人権を守る国際NGO「SOS子どもの村」の施設で火災が発生し、同国で原油開発生産案件に参画しているITOCHU Oil Exploration Azerbaijan(CIECO AZER)が被害の直後すぐに支援を決定し、SOS側も早急に修復作業にあたることができました。修復後、感謝状とともに子どもたちのお手製の御礼の品を受領し、事務所に飾っています。



クウェイト

ビーチ清掃キャンペーン「タートル大作戦」に参加

クウェイト事務所では毎年、クウェイト環境保護協会と日本大使館主催のビーチ清掃キャンペーン「タートル大作戦」に参加しており、2016年度は11月12日に開催され、社員とその家族が参加しシュワイクビーチを清掃、海洋環境保全に努めました。



中国

西部温暖計画にて後進地域の支援

中国ブロックの各拠点ではそれぞれの地域のニーズに合わせて様々な社会貢献活動を行っています。伊藤忠(中国)集団有限公司(北京)では、"MOTTAINAI"を合言葉に、北京公益服務発展促進会と北京蓝蝶公益基金の西部温暖計画に参加し、社員が不用な冬服約470枚や50以上の本や文具などを中国国内でも後進地域である西部へ寄付する活動を5年連続で行っています。



韓国

マンウォン漢江公園の清掃活動

韓国伊藤忠では毎年2回ボランティア活動を行っており、2017年3月には、歴史的にも意味深いマンウォン漢江公園の清掃を行いました。漢江は水道水にも使われている重要な川で、また社員の家族・子供たちも一緒に参加でき環境保全にも貢献できる活動として川辺・散策路などの清掃を計画、当日、拾ったゴミの量は約40袋にもなりました。



シンガポール

CPASへの寄付を通じ脳性小児麻痺の方々を支援

シンガポール会社は、脳性小児麻痺を持った人の生活支援、就業支援、教育サポート等を行っているCerebral Palsy Alliance Singapore (CPAS) に対して10,000シンガポールドルの寄付を行いました。支援の御礼として脳性小児麻痺の方が描いた絵を贈呈いただき、新オフィスの各会議室に展示し、社員の啓発に努めています。



オーストラリア

クリーンアップオーストラリアに参加

毎年3月の第1日曜日は、全豪一斉に国内の公園や浜辺をきれいにしようというClean Up Australia Dayと定められており、伊藤忠豪州会社の社員ボランティアもシドニー日本人会が開催する活動に毎年参加しています。2017年は3月5日に実施され、シドニーの北部にあるレーンコーブ国立公園の清掃を行い自然豊かなオーストラリアの環境保護に貢献しました。



カザフスタン

アスタナ博日本館に協賛

アルマトィ事務所は、2017年6月10日から9月10日まで未来のエネルギーをテーマとしてカザフスタンアスタナ市で開催されている「2017年アスタナ国際博覧会」にて、日本館へ協賛し、産官学民が一体となってエネルギーに関する日本の経験と挑戦を紹介する同館の支援を通じて、カザフスタンでの万博を盛り上げています。



国内拠点の地域貢献活動

東京本社

東京本社近辺で、社員による地域清掃活動を実施しています。地域社会の一員として、地元自治会や近隣の学校、他企業の皆さんと協力して清掃や啓発物配付を行っています。





大阪本社

2016年度で8年目を迎えた和歌山県伊都郡かつらぎ町の「天野の里づくりの会」との協働活動は、企業と農村地域の方々が地域資源を活用しながら安心・安全な米作りや地産地消の推進、地域の景観保全に協働参画するプログラムです。毎年春の田植えと秋の稲刈りに、繊維カンパニー若手社員の教育の一環としても取り組んでいます。2016年も5月30日には田植えを行い、10月2日の稲刈りに社員とその家族合計139名が参加、若手社員は重いものの運搬や側溝の泥掻き出しなどの施設整備のお手伝いも行い、「天野の里づくり会」の皆さんと交流を深めました。





中部支社

中部支社では、毎年恒例となっている名古屋伊藤忠ビル近隣清掃活動を2016年11月15日に実施しました。当日は、小春日和の中、川嶌支社長をはじめとした支社員25名、伊藤忠グループ会社から5名の総勢30名が参加し、ビル周り半径200mの範囲を手分けし多くのゴミを回収しました。



九州支社

九州支社では、通販会社のフェリシモが企画する「ハッピートイズプロジェクト(ぬいぐるみを贈る運動)に2011年から参加しています。古着などで手作りされたぬいぐるみは「笑顔の親善大使」として、これまで51,000体以上がこのプロジェクトを通じ国内外57の国や地域の子供たちに贈られ、笑顔の花を咲かせています。



中四国支社

中四国支社では、ひろしま駅伝清掃ボランティア、ごみゼロ・クリーンウォーク、フラワーフェス ティバル清掃ボランティア、クリーン太田川、マツダスタジアム周辺清掃ボランティア等、地域貢献活動へ積極的に参加すると共に、文化イベント・コンサート等への支援、地域作業所製品の支社 員による自主的購入等も行っています。



北陸支店

北陸支店では、2016年10月30日に開催された障害を持つ方々のスポーツ大会である「第25回ほほえみフェスタ金沢」に、伊藤忠グループから社員・家族など18名が、ボランティアとして競技設営・運営総括のお手伝いに参加、参加者の皆さんとの交流を深めました。約300人の参加者からも大変喜んで頂きました。



東日本大震災復興支援

2011年3月に発生した東日本大震災の復興に向けて、長期的な視点で支援活動を行っています。

詳しくはP97をご覧ください。

熊本地震被害への支援

2016年4月、熊本県を中心とする九州地域で発生した地震による被害に対し、義援金として国際人道支援組織「ジャパン・プラットフォーム」へ1,000万円を拠出しました。自然災害時の緊急援助をより効率的かつ迅速に行うため、加盟NGOの活動へ分配され、直接的な現場支援に活用されています。

さらに4月18日~27日の期間で熊本地震被害支援の社員緊急募金を実施し、集まった2,565,754円と会社からの同額マッチング分を合わせて総額5,131,508円を、社会福祉法人中央共同募金会に寄付しました。被災状況に応じて熊本県共同募金会および大分県共同募金会に按分の上、送金され、被災自治体を通じて被災された方々に直接分配されます。

また、熊本市からの要請に基づき、支援物資として被災地で必要とされている簡易トイレ1,200個、下着・インナー類1,700枚、 枕1,000個(米国陸軍・海軍の寒冷地用防寒着に採用されていたプリマロフト使用)などを、5月初旬までに避難所の方々にお届け しました。

また、災害から約3か月後の7月には、九州支社から社員が災害ボランティアに参加し、熊本市東区の個人の被災者宅にて、廃棄家 財道具の搬出と廃棄や、家の周りの片付けの作業を行いました。

災害支援義援金

国内外での大規模災害発生に際し、人道的見地より、義援金拠出・物資の提供を行っています。現地の支店・事務所とも連絡をとりながら下記の支援を実行しました。

- 最近の義援金拠出例

エクアドル地震 2016年4月	2万米ドル(約213万円)
熊本地震 2016年4月	¥10,000,000
台風18号等による大雨被害 2015年9月	¥5,000,000
ネパール地震 2015年4月	¥2,000,000
広島集中豪雨 2014年8月	¥5,000,000
中国 雲南省地震 2014年8月	30万人民元(約513万円)

社会貢献の主な活動:東日本大震災復興支援の取組

2011年3月に発生した東日本大震災は、東日本全域に甚大な被害をもたらしました。伊藤忠商事では、長期的な視野で復興支援に取り組んでいます。

伊藤忠子どもの夢ファンド

「伊藤忠子どもの夢ファンド」とは、東日本大震災で被災した子どもたちへのサポートを目的に、伊藤忠商事が2013年3月より展開している復興支援活動です。2016年度は下記の支援を実施しました。これからもさまざまなジャンルで、継続的に子どもたちの夢を応援していきます。

■ 「伊藤忠子どもの夢カップ」開催による少年野球チームの支援

震災で特に大きな被害を受けた陸前高田市で頑張っている子ども達を支援するため、陸前高田市の全スポーツ少年団5チームが参加する少年野球大会「伊藤忠子どもの夢カップ」を2016年も春季及び秋季2回開催しました。

春季大会は2016年6月11日、12日、秋季大会は10月1日、2日に、いずれも陸前高田市立小友小学校グラウンドにて開催され、伊藤忠グループ社員もボランティアとして大会に参加しました。秋季大会では、伊藤忠グループ会社の野球部の現役選手が中心となったチームと親善試合も行い子どもたちとの交流を深めました。





■ 「伊藤忠子どもの夢ラグビースクラム」を開催

2016年11月19、20日、「ラグビーの町」として知られ2019年ラグビーW杯の開催都市のひとつにも選ばれている岩手県釜石市でラグビー選手を目指して頑張っている子どもたちの夢を応援するため、現地チーム「釜石シーウェイブスJr.」に所属する小学生16名を東京に招待しました。

初日は、子どもたちは秩父宮ラグビー場で開催される公式大会のエスコートキッズを務め、翌日は、新日鉄釜石ラグビー部の日本選手権V7を支えた泉秀仁氏とラグビー経験のある伊藤忠社員ボランティア10名も指導に加わって、練馬ラグビースクールとの交流試合を実施し、ラグビーを通じて絆を深めました。





■ 福島の強豪少年野球チームの交流試合を明治神宮野球場 にて開催

福島の子どもたちは野外での活動に制限があり、スポーツの練習も思うようにできていないという現地NGOから聴取したニーズをもとに、2017年3月5日、福島の子どもたちを神宮球場に招待し、東京の少年野球チームとの交流試合を実施しました。神宮外苑及び東京ヤクルトスワローズの全面的な協力のもと、子どもたちは、実際にプロ野球選手が使用しているロッカールームや練習場を使用し、1日プロ野球選手体験を楽しみました。

軟式の小名浜少年野球教室スポーツ少年団とレッドサンズ(文京区)の試合は、投手戦の末0-0で引き分け、硬式の福島リトルと小平リトルの対戦は4-5で小平リトルのサヨナラ勝ちとなりました。その後、伊藤忠グループの野球部を中心とする社員ボランティア等と共にファミリーマート提供による昼食を楽しみました。





■ 「伊藤忠子どもの夢スノーボード教室」の開催

2017年2月4日、岩手、福島、宮城、茨城県在住のスノーボード選手を夢見る子どもたちを対象に、「伊藤忠子どもの夢スノーボード教室」を福島県裏磐梯スキー場で開催しました。日本スキー連盟にご賛同頂き、オリンピックスノーボード競技で活躍された押田奈津子氏(バンクーバー五輪代表)、橋本通代氏(ソルトレイク五輪代表)や、今井勇人氏、安立風太氏、鈴木海斗氏、橋本飛雅氏らが講師として参加。午前中は、総合滑走力を養うレッスン、午後は成果を披露する発表の場としてタイムレースを行い、子どもたちはプロのレッスンを通じてスノーボード選手への夢が膨らむ貴重な体験に目を輝かせていました。入賞者には、伊藤忠商事が展開するAIRWALKブランドのスノーボード日本代表チームオフィシャルウェア等がプレゼントされました。





■ 第3回「伊藤忠子どもの夢サマーキャンプ in 陸前高田」 の開催

2016年7月30日、31日の2日間、「伊藤忠子どもの夢サマーキャンプ in 陸前高田」を開催しました。伊藤忠商事のボランティア10名と共に、一般公募で集まった陸前高田市在住の小学4年生~中学1年生の26名、米国の大学生や陸前高田市と地域創生などの連携協定を結んでいる立教大学及び岩手大学の留学生・帰国子女の学生などの20名が、英語によるサマーキャンプを楽しみました。この1泊2日は、英語はコミュニケーションの「手段」であり、キャンプファイヤーなどアメリカのサマーキャンプでよく行われるアクティビティやスポーツなどを通して、子どもたちに異文化に触れる機会を提供することができました。





■ 東京都交響楽団と協同して音楽を通じた復興支援

公益財団法人東京都交響楽団 (Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra) と協同して、2013年度から音楽を通じた復興支援を実施しています。

2017年1月16日、17日、東京都交響楽団に協賛し、震災により大きな被害を受けた福島県の子どもたちを音楽で励ますため、「TMSO×ITOCHU Class Concert」を開催しました。3回目の今年は、工場跡地や廃校になった学校を仮校舎にしているため、様々な地域から長時間かけて通学する生徒もいる葛尾小学校、富岡第一・第二小学校、浪江中学校や、もとの学校で再開するも、当時の在籍数の3分の1の人数になった川内小学校を巡り、弦楽四重奏の演奏会を行いました。

授業形式のコンサートは、演奏者からヴァイオリンの弾き方を教えてもらう楽器体験の後、クイズでの解説を交えながらチャイコフスキーの組曲「くるみ割り人形」などの名曲を演奏し、最後は合唱曲「ビリーブ」や、浪江中学校では生徒達が作詞した「未来の光へ」で生徒達の合唱と共演しました。

2016年度はClass Concertに加え、東京都交響楽団が2月22日に開催した、いわき市内の小中学生約3600人が参加したオーケストラ公演「ボクとわたしとオーケストラ〜音の輪でつながろう♪〜」にも協賛しました。大合唱とオーケストラとの共演によって、仲間と心がつながる素晴らしさを伝えました。また、Class Concertで訪問した葛尾小学校の全児童9名を本公演に招待し、公演後、指揮者との交流、クイズやホール見学、再会した楽団員からのサプライズ演奏など、楽しい時間を過ごしました。





伊藤忠たかたのゆめプロジェクト

伊藤忠商事では、食品原料の販売会社である伊藤忠食糧株式会社を通じて、岩手 県陸前高田市のブランド米「たかたのゆめ」の販売支援を実施しています。

「たかたのゆめ」は、津波で甚大な被害に遭った陸前高田市が、地域競争力の確保、農業復興のシンボルとして、地域ブランド米としての確立を目指し2013年秋から展開しているお米です。本プロジェクトでは、生産過程においても伊藤忠グループの社員ボランティアが現地農家の方と交流しつつ、2016年度も5月の田植えから、10月の稲刈りまで継続して支援しました。また、「たかたのゆめ」の認知度向上を目的に、東京本社周辺の飲食店を巻き込むなど様々なPR施策を実施しています。2017年3月11日には、伊藤忠青山アートスクエアにて「陸前高田市物産展」を開催し、市の職員と共に伊藤忠商事の社員ボランティアが「たかたのゆめ」のPRを行いました。

伊藤忠グル―プのプラットフォームやノウハウを活用し、「たかたのゆめ」の生産から販売までを支援することで、本業を通じた被災地支援を行っています。





伊藤忠記念財団を通じた被災地支援活動

■ 伊藤忠記念財団と共に 東南アジアに絵本を贈ろう in 東北

「東南アジアの子ども達へ日本語絵本に現地語翻訳シールを貼って届ける活動」を行っている公益社団法人シャンティ国際ボランティア会より購入したキットを使用し、現地語の翻訳シールを絵本に貼る作業を、伊藤忠記念財団と共に、毎週、社員ボランティアが行っていますが、この活動を被災地の子どもたちにも拡げる取組を2014年度から実施しています。2016年度は、福島、岩手、宮城の3県の家庭文庫や図書館、小中高等学校など16ヵ所で、現地で子どもの読書活動されている7団体のご協力を得て、延べ462名がこの活動に参加しました。

- 株主の皆様と行う「子どもの本100冊図書の寄贈」

株主様宛情報の電子化にご承認いただき、節約できた用紙代・郵送料等を、伊藤 忠記念財団が行う文庫助成に協力する活動を2012年度から行っています。 2016年度は4,958名の株主様にご賛同いただき、伊藤忠商事からも同額のマッチ ングを加え、伊藤忠記念財団が東日本大震災で大きな被害を受けた以下の10校 に、地元書店を通じて新品の図書セットを届けました。



大船渡高校の生徒さんが翻訳シールを貼り付け



寄贈先の女川小学校の児童たち

【2016年度寄贈先】

岩手県	唐丹小学校(釜石市)、城北小学校(盛岡市)、船越小学校(山田町)
宮城県	女川小学校(女川町)、閖上小学校(名取市)、坂元小学校(山元町)、荒浜小学校(亘理町)
福島県	相馬市立飯豊小学校(相馬市)、小野町立飯豊小学校(小野町)、湯本第三小学校(いわき市)

その他の復興支援活動

■ 伊藤忠青山アートスクエアにて「岩手県陸前高田市の物産展」などの東日本大震災復興支援イベントを開催

3月11日(土)、陸前高田市役所の職員に販売員として来ていただき、陸前高田市物産展を開催しました。昆布や醤油、リンゴ、トマトなどの陸前高田市の名産品や伊藤忠グループで応援しているブランド米「たかたのゆめ」など陸前高田市の様々な食材を、市役所の若手職員の方と共に、伊藤忠商事と、食品原料を販売する伊藤忠食糧の社員もボランティアとして販売に協力しました。その場で業者がつくる出来たての"たかたのゆめ"ポン菓子や近隣のレストランがつくった"たかたのゆめ"おにぎり弁当なども好評で、最近の様子など同市の現状についてお聞きになるお客様も多く、食材を通じて様々な交流が生まれました。

また、女優 東ちづるが代表を務め、生きづらさを抱えるマイノリティへの啓発を行う一般社団法人Get in touchによるアート展を、「有事に備えて普段から彼らのことを理解してほしい、そんな社会をつくろう」という願いを込めて、この日から開催しました。陸前高田市在住の障害があるアーティスト 田崎飛鳥さんの作品「希望の一本松」の特別展示をはじめ、時報に合わせて黙祷をした後、被災地支援映画『ガレキとラジオ』の上映会も行い、来館者が被災地に心を寄せた1日となりました。





社会貢献の主な活動:社員のボランティア支援

伊藤忠では年間最長5日間のボランティア休暇を取得できる制度や、休日・昼休みなどに参加できるプログラムなども開催することで、社員の意識醸成に努めています。

東日本大震災復興支援 社員ボランティア

震災直後から始まった復興支援ボランティアを2016年度も継続、伊藤忠グループとして合計48名が参加しました。主な活動内容は、伊藤忠子どもの夢ファンドで企画しているイベント等を通して、被災地の皆さんの復興を側面から支援するものになってきています。具体的には、田植え、稲刈りや、イベント開催支援、子ども向け英語キャンプや少年野球大会運営等の活動を行いました。

被災地の真の復興にはまだまだ時間がかかる見込みですが、今後も被災地の状況に即したボランティア活動を続けていきます。





WFP 国連世界食糧計画への支援

世界の飢餓・貧困問題を少しでも解消するため、国連の食糧支援機関であるWFP国連世界食糧計画の公式支援窓口である国連WFP 協会の評議員となり、さまざまな活動に参加しています。

2017年5月に子供の飢餓の撲滅キャンペーンである「ウォーク・ザ・ワールド」が横浜と大阪で開催され、伊藤忠商事及び伊藤忠 グループ会社社員・家族が横浜には601名、大阪には189名参加しました。また、東京本社で12月に募金を実施し、WFPの活動をパネルで紹介するとともに、WFPの活動を支援しています。





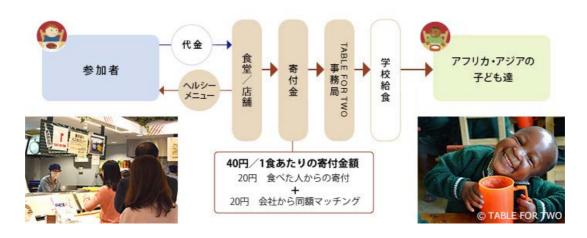
子供の飢餓の撲滅キャペーン「ウォーク・ザ・ワールド」に参加(左が横浜、右が大阪の様子)

途上国と先進国の食のアンバランスを解消する「TABLE FOR TWO」 (TFT)

「TABLE FOR TWO」(「二人の食卓」)は、開発途上国が抱える飢餓と、先進国が抱える肥満や生活習慣病の同時解決に向けて、時間と空間を越えて食事を分かち合うというコンセプトの社会貢献プログラムです。

2007年10月に日本で創設され、伊藤忠商事は他社に先駆けて翌年4月より東京・大阪・名古屋の社員食堂で、本格導入しました。 健康に配慮したTFT対象メニューを社員が購入すると、1食につき20円が寄付されます。これに会社も同額を寄付するマッチング・ギフト方式によって、20円が加算されます。つまり、1食につき40円がTABLE FOR TWOのプログラムを通じて開発途上国の子どもの学校給食になっています。

現在、東京本社ではTFTメニューを毎日提供しています。



- 2016年度の取組み

2016年7月に、「TFT THANK YOU 月間」と題し、TFTメニューを利用している社員へ感謝を伝え、かつ更に利用を促進するために、TFTメニューを選んだ方に暑い夏に合わせてフルーツ酢ドリンクを1杯サービスする企画を行いました。2016年10月には、10月16日の世界食料デーに合わせて「『たかたのゆめ』を食べて届ける!TFT世界食料デーキャンペーン」を実施し、伊藤忠グループが支援している陸前高田市のブランド米「たかたのゆめ」の新米を使用した、東日本大震災復興支援も国際協力も同時にできる期間限定メニューの開発や動画によるTFTの宣伝など、独自の取り組みを行いました。2016年度は、27,318食の利用があり、伊藤忠商事のマッチング寄付を合わせて1,092,720円(給食換算54,636食分)を寄付することができました。こうした活動が評価され、2017年5月にはプラチナサポーターとして表彰されました。







「『たかたのゆめ』を食べて届ける!TFT世界食料デーキャンペーン」の期間限定メニューと、食堂内の掲示版一面に掲示した支援先の写真

その他社員が参加できるボランティア・プログラム

■ 飲料自動販売機による「チャイルド・ケモ・ハウス」の支援

日本初の小児がん専門治療施設「チャイルド・ケモ・ハウス」の運営をサポートするため、東京・大阪本社内にケモ・ハウス仕様の飲料自動販売機を設置し、両ビル内に設置されるすべての飲料自動販売機の売上の6~10%相当の金額を寄付しています。2016年度は計420,277本の売上により、計2,521,662円の寄付を実施しました。



■ 日本赤十字社による献血活動(東京本社)開催:1月、7月

毎年2回、日本赤十字社による献血活動を東京本社内で実施しています。献血された血液は、手術はもとより、白血病などの治療にも広く活用され、献血の重要性はさらに高まっています。当日の体調、海外滞在時期や地域の規定により、献血できないケースもありますが、毎回、グループ会社を含め多くの社員が会場に足を運んでくれています。

2016年度も2016年7月22日と2017年1月27日に実施し、それぞれ97名(申込者数106名)、91名(申込者数123名)の社員が協力しました。

- 神宮球場(青山)にて伊藤忠野球教室を開催

青少年育成の一環として障害のある子ども達に、さまざまなことに挑戦する機会を与えたい、自分の可能性を見出す機会を創出する手助けをしたいとの考えのもと、2007年より野球教室を開催しています。第10回となった2016年度は本社のすぐ近くにある神宮球場にて、2017年3月6日(日)に開催しました。当日は、さまざまな障害のある子どもたち50名に対し、約80名の伊藤忠相互会野球部やグループ会社からの社員ボランティアが参加、元選手でヤクルト球団職員の山部太氏と河端龍氏の指導のもと、お子さん一人一人にボランティアがついてサポートをし、たくさんの笑顔が溢れる教室となりました。参加者の保護者からは「家庭や学校では見られないような活き活きとした姿を見ることができた」などの感想も寄せられ、大変好評をいただき、毎年社員ボランティアも増加しています。





■ 絵本を届ける運動(東京/大阪両本社、中部支社、九州支社、東北支社、北陸支店)

日本語絵本に現地語のシールを貼り、東南アジアの子どもたちに贈る活動で、東京本社では、毎週 木曜日の昼休みに5F社友室を借りて活動中です。



■ 「スワンベーカリー」のパン販売

スワンベーカリーとは、障害を持つ人々に適正な賃金での雇用を促進する目的で、ヤマト財団により設立されたベーカリーで、2008年5月より、毎週水曜日に「スワンベーカリー」のパンを東京本社の社員食堂にて販売しています。多くの社員が積極的に購入し、スワンのみなさんからも「毎回パンをたくさん買ってもらい、有難い」と好評です。

